

## 昭和 10 年代の高知県域地方紙に掲載された洞窟の所在 その 2 「床華洞」

The Location of Caves Published in Kochi Prefecture Local Newspapers in 1935 & 1936, Part 2 " Shoka-do Cave "

千葉伸幸 (Nobuyuki CHIBA)

地底旅団 ROVER 元老院所属 東京都在住

### 1. はじめに

土佐国(現:高知県)の歴史、地理、考古、民俗を調査研究する愛好会「土佐史談会」の機関誌「土佐史談」には、以前は新聞雑見という項目があり、各新聞からの地域ニュースが転載されていた。そこには高知県内で 1935(昭和 10)年と 1936(同 11)年に鍾乳洞がそれぞれ発見されたとあり、洞内の様子や期待度の高まりと共に掲載されている。

高知県は龍河洞、菖蒲洞など 160 洞もの石灰洞や非石灰洞が報告(満塩ほか, 2001)されている地域であるが、新聞記事内の洞窟名では報告されていない。そこで記事から該当する既知の洞窟を推察した上で実地踏査を行い、これらがどの洞窟に該当するか特定することを試みた。

なお、尺貫法での長さの単位は一尺=約 30cm である。



土佐市と旧北原村の位置 (Map-It マップイットを修正・加筆)

### 2. 記事②「北原地床溪に発見された大鍾乳洞」

1937(昭和 12)年発行の「土佐史談 第五拾八號」には以下の新聞記事が縦書きで掲載されている。

<原文>

#### 北原地床溪に発見された大鍾乳洞

稀有の溪谷美を以て最近縣下の有力観光地として登場した高岡郡北原村「地床溪」の地元では去る四日その入口に當る村役場から約一キロ西北の地点に鍾乳洞を含む一大洞口を発見、目下これが探検に地元をあげて大童の活動をなすと共に縣観光係に對し調査を求めているが、探検の進むに従つて意外の大鍾乳洞が発見され、地元民を狂喜せしめてある、此洞の存在は古老の言傳へにより認められていたが、最近同村の海路國喜氏の発見によつてはじめてその正體の一部をつかんだもので、垂直の直径九尺の洞でその下底から横に幾つもの横洞があり、その主なるものは現在百五十尺の地点まで探検が進められてある、その結果百五十尺の地点に約百畳式の大洞が発見され探検者を呆然たらしめてある、なお入口の下底から垂直に大洞が開けてをりこれが主要洞とみられてあるも、これには探検の手がなほまはらぬ状況で、探検の進むにしたがつてどの程度の大がかりな洞となるか見透しがつかないが、石筍、鍾乳石等に富み、しかも現在まで発見された部分は僅か端緒にすぎないものとみられ、龍河洞を凌ぐものありとされてある。

(昭和一一、一二、一六高知新聞・一二、一七土陽新聞)

<現代文>

#### 北原、地床溪に発見された大鍾乳洞

稀有の溪谷美をもって最近、県下の有力観光地として登場した高岡郡北原村「地床溪」の地元では去る 4 日、その入口にあたる村役場から約 1 キロ西北の地点に鍾乳洞を含む一大洞口を発見、目下この探検に地元をあげて大わらわの活動をすると共に、県観光係に対して調査を求めているが、探検が進むに従って意外な大鍾乳洞が発見され、地元民を狂喜させている。

この洞窟の存在は古老の言い伝えにより認められていたが、最近同村の海路國喜氏による発見によって初めてその正體の一部をつかんだもの。垂直の直径 2.7m の洞窟でその下底から横に幾つもの横洞があり、その主なるものは現在 45m の地点まで探検が進められている。その結果、45m 地点に約百畳敷の大洞が発見され、探検者を呆然とさせている。

なお、入口の下底から垂直に大洞が開けており、これが主要洞とみられているが、これには探検の手がなお回らぬ状況で、探検が進むに従ってどの程度の大がかりな洞窟となるのか見透しがつかないが、石筍、鍾乳石等に富み、しかも現在まで発見された部分は僅か端緒に過ぎないものとみられ、龍河洞を凌ぐものであるとされている。

(昭和 11 年 12 月 16 日 高知新聞・12 月 17 日 土陽新聞)

※原文にある海路姓は正しい海治姓に修正。

※記事①「新改若宮にて鍾乳洞発見」はケイビングジャーナル第 78 号 10 ページに掲載。